

自分は理解されなくても、障がいのある人たちは理解したい

出身は富山県。縁もゆかりもなかった北本市で、障がい者グループホームを次々に立ち上げる大巻光さんに話を聞いた。



グループホームあおとり代表
ひかる
大巻光さん

「障がいのグループホームを作ろうと決めて、全国的にホームが少ないまちを調べたら、それが北本市だったんです」
そう語るのは、昨年1月にオープンした、障がいのためのグループホーム「あおとり」の代表取締役を務める大巻光さん

理解されなかった「睡眠障害」

「就職した会社が倒産してから、複数の業種を経験したんですが、どれもしっくりこなくて。自分がやりたい仕事ってなんだろうとこれ

れまでを振り返ったときに、大きかったのが「睡眠障害」だったんですね」
睡眠障害とは、睡眠に関連した病気の総称をいう。大巻さんの場合は、朝に起きられず、夜は眠れないという症状だ。

「病気だとわかるまでは、単なるだらしない人」と言われ続けて、自分でもそうなんだと思っていました」
物心ついたころには、朝に起きられない状態が続いていた。小学生のとき、通学班の集合時間に間に合わず、一人で2キロ近くの通学路を登校していた。「大人になれば治るだろう」と思っていたのが、中学、高校と進学しても症状は変わらず、深刻に悩むようになった。

「本当にいろんな目覚まし時計を使いましたし、医学書を読んだり、薬やサプリを飲んだり……それでも

も改善しなくて。周りに相談しても、真剣に取り合ってもらえない。どんどん自己肯定感が下がっていききました」

当事者に近い自分だからできること

転機は、都内の大きな病院で検査したこと。脳波を調べたところ、睡眠障害とADHD（発達障害のひとつ）の傾向があることが分かった。障がいのという領域には達していないものの、グレーゾーンに位置していることを知った。

「脳波を図を見たら明らかにその傾向が強くて、『そりゃあ、無理だったわ』と諦めがついたんです」
そうして、改めて使命感を感じる仕事について考えた時に、自分と同じ境遇で困っている人たちの助けになりたいと思うようになった。

「発達障がいも障がいですし、さらに知的障がいや精神障がいの人たちのために働けるなら、すごくモチベーションが上がるなと思っただけです」
そこでたどり着いたのが障がいのグループホームという事業だ。北本市でホームを開くと決めて、物件探しから始めた。



物件を見つけては電話して、断られて。1件目を見つけたまで半年間やり続けましたね」
多くの賃貸物件が、障がいのホームとしての用途を想定していない。大巻さんは、不動産業で働いた経験から、大家さんが不安に思う部分をケアするプレゼン資料も用意し、契約が決まった物件については自治会に入り、近隣へあいさつに回った。



頑張らなくていい、そのままの自分で暮らす

「あおとり」は知的障がい・精神障がいのある人たちが生活するグループホームだ。世話人が食事の提供や部屋の清掃、入浴のお手伝い、薬の管理、ごみ出しなど、本人の自立度や意志に応じてサポートする。

「あおとり」が大事にしているのは、その人らしく暮らしていいこと。朝起きられない、作業所に行けないなど、それぞれが抱える悩みに優しく寄り添う。「鳥だって、無理して飛ばなくていい。焦らず自分のペースで暮らしてほしい」と代表の大巻さんは話す。

入居者の障がいの特性や生活リズムは様々だ。お試し入居期間を長くしたり、初めは家族と一緒に泊まれるようにする等、個別の事情に合わせて対応している。ある入居者さんは「他にも入居者がいますが、トラブルなく過ごせてますね。穏やかな気持ちで勉強に集中できています」と話してくれた。「世話人もみんなモチベーションが高くて。入居者さんとの触れ合いを通して生きがいづくりみたいな感じで働いてくれています」と大巻さんは語る。12月には5棟目がオープンする。今後は訪問看護事業も開始し、より質の高いホームを目指していく予定だ。

Challengedの現場 3

グループホーム
あおとり
電話 050-3649-5487
メール aotori@gha.jp

Challengedの現場 4

放課後等デイサービス
gleam
住所 朝日 2-174
電話 048-598-6006
FAX 048-598-6019

障がい関係なく、その子の良さを見つける

放課後等デイサービスgleamは、障がい等のある子どもたちの居場所として令和4年に開所した。3歳から高校2年生まで約30人が通っている。

「働いている親御さんたちの声にもっと応えたくて、前職の仲間と一緒に立ち上げました」と代表の呈尚子さんは語る。

「私が職員に伝えているのは、みんなその子に対しては『初めまして』だよということ。障がいの種別に関わらず、その子自身の良さとか強みを見つけていることを大事にしています」

gleamではリサイクル活動や体操、グループワーク、作品づくりなど、子どもたちに合わせてプログラムを組んでいる。夏休み期間は毎日のように市外・県外の遊園地等に出かけ、畑

で種植えから収穫を行う他、マーケットへの出店など、施設外の活動も積極的にしている。どの子どもたちにとっても、ここで過ごす時間は明るいものであってほしい——という思いはgleam《光》の名に現れている。

子どもたちも、いずれは社会に出ていく。「卒業することを思うと今から寂しいですよ」と呈さんはこぼす。

「この子たちが社会になじんで、障がいがあっても、そうでなくてもお互いに気持ちよく暮らしていけるように、必要なことを教えています。だって、ここを出てからの方が長いですからね」

たいらしよう子
呈尚子さん



&green market に出店

